

■ 藤山 正二郎 悲しきカシュガル

■ 出張日程 : 2003年9月11日~22日

■ 訪問地 : 新疆ウイグル自治区、カシュガル

■ 報告

5年ぶりにカシュガル(中国・新疆ウイグル自治区)を訪れた。聞いてはいたがその変貌には驚く。空港から続く道路も、市内の主要な道路もすべて拡幅され、その両側に並んでいた雑然とした家並みもすべて撤去されていた。有名なエイティガル・モスクの前の広場も、その横のバザールも工事で掘り返され、高層のショッピングセンターの建築が始まっている。カシュガルといえばウイグル人の心のふるさとである南疆の中心都市である。一番ウイグルらしさを残していたはずなのだが、漢人の流入も激しくて、都市部では50%にもなると聞いた。

これは西部大開発の一環なのだろうか。チベットなど内陸部ではいたるところで開発が行われ、同じように道路、空港、高層建築など中国的な面子主義というか、とにかく目立つ形で開発が行われている。民族的な風景



を破壊し、エスニック観光からも困った事態を招いている。

カシュガルについてときはサーズ騒動も一段落して、パキスタンやクルグスへの観光の中継地として、かなりの日本人が来ていた。少し前までは、患者が出たわけでもないのに、観光客がまったく来なくて、この旅行社も休業していたらしい。

聞き取り調査は短期間という事もあり、それほどできなかったが、マシュラップ、結婚、伝統的な職人の後継などについて調べた。旧市街のコズチヤルベシで陶器を作る人に会う。その地名からわかるように、ここは陶器を作る人が昔はたくさん住んでいた。今は儲からないから、自分一人になってしまったという。息子も継ぐ様子はない。文化大革命時代から郊外で農三師という建設兵団で、親から受け継いだ陶器作りも中断して、農業をされていた。今の家は写真でもわかるように崖を利用した階段住宅である。昔は雪解けの時期によく洪水があって、そのためこのような高台に家を作った。再開発で家の立ち退きを言われなかと心配していた。

博物館の人にマシュラップについて話を聞く。マシュラップはオットズ・オグル(30人の少年)ともいう。年齢階梯集団で男子の通過儀礼的な機能



を持っている。共同体の中で生活していくためのモラル、作法、芸能などが教えられる。この同輩集団は名づけ、割礼、結婚、葬式などの人生儀礼で助け合う。11月から2月にかけて農作業がない時期に、1週間に1回土曜日の夕暮れに集まる。人民公社、文化大革命などの時期を経て、行われなくなったが、改革開放になってから、復活しているところもある。